
金魚鉢と休日の学校に

絶氷のシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金魚鉢と休日の学校に

【コード】

N6120T

【作者名】

絶氷のシア

【あらすじ】

今回は唯ちゃん視点で。ふんすっ！やっぱりこの姉妹を書くのは楽しいです

「うーいー。ご飯」

今は夏休み。

ちよつと早めに起きた私は一階に下りてリビングに入るなりそこにいるはずの妹に声をかけた。

けれども返ってくるのはしーんとした静寂だけ。

おかしいな。

そう思つてリビングを見渡して見ると見慣れたはずの憂の姿が見当たらない。

代わりに見つけたのはテーブルの上に置いてあつた一枚のメモ。

可愛い文字でそこには、

『お姉ちゃんへ。』

今日私はクラスの係りがあるから学校に行つてきます。

結構時間がかかると思うから、ご飯は作っていくね。

憂

て書いてあつた。

そういえば昨日の晩御飯の時…

『お姉ちゃん、私のクラスに金魚がいるんだ！すごく可愛いんだよ！』

なんて言つてたような気がする。

係りつていうのはたぶん金魚のエサやりとか水槽を洗つたりするのかな？

そんなことを考えながら私は憂の残していつてくれたご飯をレンジでチンして食べ始める。

にしても、可愛い金魚か！。

…見てみたい。

今すぐ。

憂と一緒に。

そう思った私はご飯を食べ終えてすぐに自分の部屋へと戻り、夏休みが終わるまで着ない予定だった制服に袖を通す。
うん。

準備万端！

着替え終わると私は自慢の相棒に駆け寄る。

「ちょっと学校に行ってくるけど、いい子にして待っててねギー太」
今回はギー太を持っていく用事が無いから、本日は家でお留守番。
ギー太をスタンドに戻して私はゆっくりと、でも速まる気持ちで家を出た。

にしても…

「…あつっーい」

携帯を確認してあらビックリ！

今日の最高気温は30度越えですって！

家を出た瞬間にこんな試練が待ち受けているなんて…

危うし！

平沢唯！

そんな一人劇をやっていると、小さな公園が見えてくる。

確かここには水場があつて涼むには持つてこい！

「ちよつとだけなら…いいよね」

誰に確認するわけでもないけれど、自分に言い聞かせるように呟いて私は公園に入る。

夏休みだから子供たちもいるかな？

そう思ったけれど、見てみると公園の中は誰もいない。

それでは遠慮なく

目的の水場に行き、私は靴とタイツを脱いで足だけ浸かる。

「んっ つめたっい」

夏なのにこの水の冷たさは反則だ！

しかも私の座っている場所はちょうど木陰になっていて、とっても涼しく気持ちがいい。

私は両足を上げたり下げたりして、水が跳ねるのを楽しんでいた。

「…憂と一緒に涼みたいな」

思ったことを口にする、無性に憂に会いたくなる。

私は思っていたよりも早く公園を後にすることにした。

…はっ!?

ち、違うんだよ?

ちゃんと早く行くつもりだったんだよ?

本当だからね?

誰に言うでもなくまた一人芝居。

グルリと一周見回して一人で苦笑い。

でも…

憂に会えばきつと返事が返ってくる。

私は暑いことなんか忘れて、夢中で学校に走り出す。

はっ…はっ…はっ…はっ…

息が乱れて額からは汗が吹き出してくる。

じゃあ学校に行ったら憂とジュースでも飲もう。

強い日差しに高い気温。

憂は大丈夫かな?

汗かいてないかな?

流れる景色。

流れる時間。

きつと…二人ならもつと楽しい!

あつと言う間に私は学校の校門前にたどり着く。

「はあ…はあ…」

乱れる息を整えて、私は下駄箱で靴を履き替える。

急いで、でもゆっくりと憂のいる教室へと足を運ぶ。

確か…この教室だったと思うんだけど。

私もこの生徒だから誰かに何かを言われることも無いんだけど。

何も用がないのに学校に来るっていつのはやっぱりなんか気恥ずかしいな。

私は無意識のうちにこそこそと静かに目的の教室まで向かった。

「んーと…：いたいた」

私の記憶力もすごいよね！

たった一回で憂の教室まで来ることができたんだもん。

私は開いていた扉から教室の中を確認して、ターゲットがそこにいることを捉える。

「目標…：捕捉」

なんかかっこいいからそのままのノリで進行していたら、憂は空の金魚鉢を持って教室の後ろの扉に向かう。

「わわっ！やば！」

急いで空いていた隣のクラスに隠れる。

ふう…：見つかるそこだった。

扉の陰から見ると、憂は水道に行くみたい。

ていうか私なんで隠れたんだろ？

自分への疑問はさておいて、私は後を付けてみることにした。

「ふんふんふーん」

憂は鼻歌を歌いながら手際よく金魚鉢を洗っている。

ご機嫌ですな

…：ていうかそろそろいいんじゃない？

むしろ限界？

行っちゃおう！

私は自問自答しながら憂へと近づいていく。

もちろん忍び足で。

そ〜とそ〜と

私を見た憂はなんて言うだろう？

うふふ

楽しみだな〜

あと三步。

あと二歩。

あと一歩。

私は驚かせるために身を構える。
けれど…

「わっ！」

「ひゃあんっ!?!」

…驚かされたのは私だった。

私が驚かそうとした瞬間に憂が振り向いて大声を上げる。

びび、びっくりしたー!

思わず尻餅ついちゃったよ。

「えへへ 大成功」

「ひ、ひどいよ!憂!」

一本とられた…

無念なり…

「だってお姉ちゃん、ここだと影になって後ろからでもよくわかるんだよ?それに教室でもちよこつと見えてたし」

こちらスパイの唯、ミッション失敗しました。

「あーあ、残念。憂の可愛い悲鳴も聞きたかったのになー」

「それはまたの機会ってことで」

言いながら憂は尻餅をついた私に手を差しのべてくれた。

私は素直にその手をとって立ち上がる。

「ありがとう」

「うふふ どういたしまして あ、スカート汚れてるよ」

憂は私を後ろ向きにしてスカートの汚れた部分を手で落としてくれた。
た。

「うん、綺麗になったよ」

「いつもすみませんなあ」

「いえいえ ところでお姉ちゃん、何で学校に来たの?」

憂は不思議そうに私を見る。

え〜と…

あれ?

「なんでだっけ?」

カクン、という擬音が聞こえてきそうなほどに憂がこける。
だっしょうがないじゃん。

忘れちゃったんだもん。

それでも必死に思い出そうとする。

ん〜と…そうだ！

「金魚見に来たんだった！」

「金魚って私のクラスの？」

「そうそう」

すっかり当初の目的を忘れていた。

でも本当は…

本当の理由は…

憂に会いに来ただけだ。

それは恥ずかしいから言わないことにしよう。

「なあんだそうだったんだ。それじゃあ教室に行こう」

「うん」

私たちは金魚鉢を洗い終えて教室に戻る。

どうして隣に憂がいるだけでこんなにも世界が違って見えるんだろ
う？

それがとっても嬉しかったんだ。

「どうしたの？すごく嬉しそうな顔してるよ」

「え？ふふん ちよっとね」

私の言葉に憂はにっこりと微笑んだ。

憂だっけ嬉しそうな顔してると思うよ

教室の中を改めて確認してみるとバケツが一つおいてある。

しゃがみこんで中を除くと…

「きゃあああ 可愛いいい」

そこには二匹の小さな金魚が楽しそうに泳いでいた。

「ね？可愛いでしょ？」

「うん」

思わず悲鳴をあげちゃうくらい可愛い。

私が一人で悶えてる間に憂はバケツから金魚鉢へと金魚を移していた。

「これで本日の作業はおしまい、と」

金魚鉢に移った金魚はとても気持ち良さそうに水の中を泳ぎ回る。

私たちはしばらくの間、その光景に見入っていた。

「…それじゃ、帰ろうか」

「そだね〜 あ、憂。喉かわかない？」

「え？そういえばなんだかわわいてるような…」

「でしょでしょ？自販機でジュース買おうよ！」

「うんそうだね…てお姉ちゃんそんなに強く引っ張らないですよ」

私はたまらなくなつて憂の手を引いて走り出す。

一人きりの一日はもう終わり。

二人の一日は今始まったんだからね。

「早くしないと売り切れちゃうよ〜？」

「それは絶対無いと思うよ？」

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6120t/>

金魚鉢と休日の学校に

2011年6月3日05時00分発行